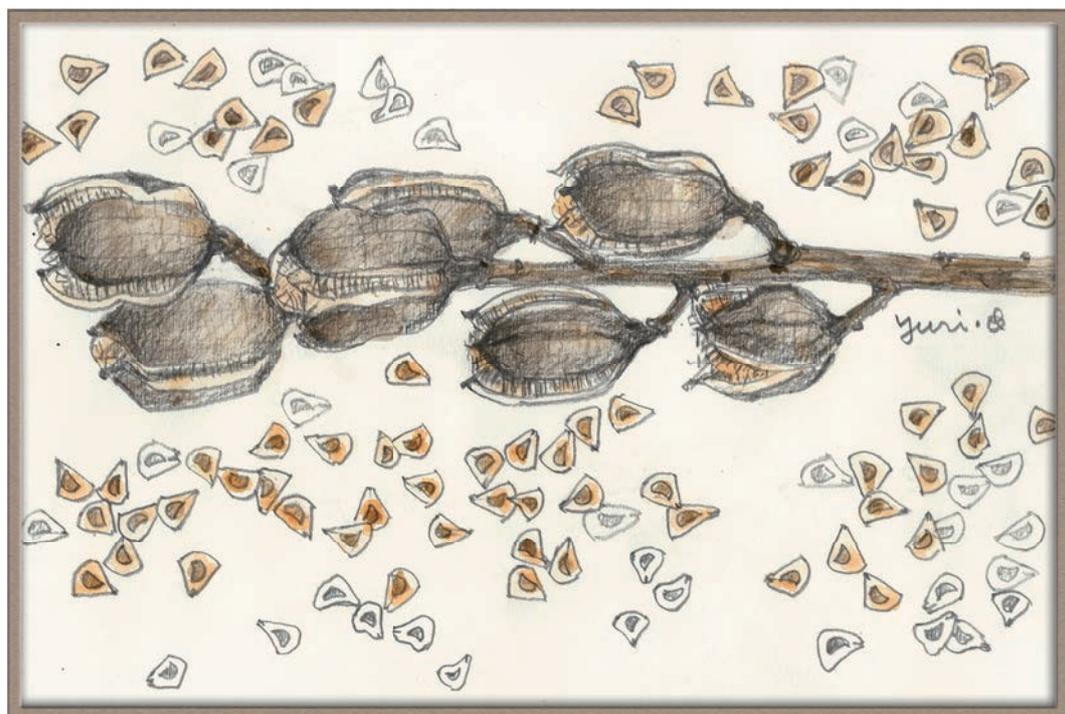


三河 アララギ

2020年2月 如月 きさらぎ

二 月 号

第 六 十 七 卷 第 二 号



ニューヨーク日記(160) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

CARE PACKAGE FROM GENEVA!

Blue Shoe Diaries



十代のころからの友達って良いよね～ 安心出来る, 信用出来る友達だよ～ 暫く会わなくても話したと一瞬の内にお話弾むよね～ そんな大親友が最近ジュネーブに寄った時、私の大好物のお菓子を箱いっぱい送ってくれたの！開けたら頭の中が十代に戻って大はしゃぎ。これを一緒にNYで喜ぶのはジュネーブ時代のお友達しかいないと思い、早速連絡して早く来ないと食べちゃうよ～って。このパプリカのポテチたまらん！

Friends you make in your teens know you well. Really well. And they know you for you, not so much for what you do and who you know. Even if some time passes, once you talk or see each other, you can pick up right where you left off. One of dearest friends was passing by Geneva recently and sent me this care package with many of my favorites! Once I opened the box, it was like time tripping to my teens. The only course of action was to share this with another friend from Geneva days who lives in NY. Message: 'Got paprika chips, hurry before I eat it all'.

アカンサスの徑

御津磯夫

雨も風も花散るときはたちまちに松の葉のうへ立石のうへ
木の下の苔のしとねにただひとつおちたる椿ことさら朱し
われの手に土やはらかし朝いでて稚な竹の子籠に盛り上ぐ
新芽ふく定家かづらのまつはりて身を細めたまふ石のみほとけ
わが家をいでし藤原佛は國の寶裳の截金の菊もかそかに
たどり来てここにねむれる稚子も千手観音の裔につらなる
菩提樹の一葉一葉の葉脈にすがし見すればみほとけるます
さづかれるものは南天竺の白檀の香はしき珠を輪につらねたり
み佛に千手をかぞふ存ながらへていくたびわれの福さきはひにあふ
雨に来て寶庫の扉押しひらきわれのいのちの佛に對ふ

ははぎくさII

大須賀寿恵

街路樹の楠の木繁り新らしき碑に読む「史蹟曲尺手門之址」

二才の吾れの病み危きに断食して祈りしことも父の日記に
親指のささくれにいたくしみゆきて幾日とれざる印刷の墨

「引馬野阿礼の埼斎藤茂吉」の碑は自然石なり白き流紋

み社の木蓮格子にあひ寄りて拓本とらむ風風ぐを待つ

横たへし竹のたばねに樋の水の落ち叩きつつ竹の鳴るなり

京ヶ峰の紅葉に夕光残りゐて聾啞研究の会終りたり

阿礼の埼の万葉歌碑へのぼり来ぬ石切山の発破轟く

雨降るに雨に濡れつつベコニアに水そそぎをりこの特殊児は

聾学校の測定室にピアノテレビ並び光れり高度補聴器

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

深々と曇れる夕べにききてをり生きゆくことは勉強なり

命たもち帰りし翁の植ゑたりき千坪の朱の曼珠沙華

十日あまり心はづみぬ赫々とわれをめぐれる曼珠沙華の花

白萩に紅萩まじり草叢に夕べとなりて雨近き風

庭のみち萩咲き撓みくぐりゆく肩に花付けて奥の庭まで

天つ日に芒穂ひかり輝けりいたしかたなしわが草の庭

金色にも芒穂ゆらく中庭にわが洗濯機のブザー鳴るまで

石段に瀧なす雨の流れゐて那智権現に椰を受けにき

庭土に降して住吉の楡高し春楡秋楡の異り知らず

朝々の大根おろしに大野郡のカボスしぼりて秋ふけにけり

はゞきくちII

河原静誠

青蓮華の花の散りしく十王堂吾をはぐくみし伯母はいまさず
椎の実の黒きつぶら実拾ひをりわれをはぐくみし十王堂の庭
石仏あらはになりし十王堂庭の草木は誰が伐りしか

裏木戸をふさぐ筈なぎ倒し十王堂の仏前に坐る

幼児期を吾が育ち来し十王寺を師の七回忌の今日立ち去らむ
木枯のふき来る水漬田の道寒く猫待つ家に吾が帰りゆく

一日の保育を了へて帰り来し部屋にたはむる三毛と虎猫

膝の上に猫居らしめてレポートのために撰訳集を今宵もよみぬ
園児等の午睡に交り今日もまた吾が三毛猫のやすくねむれる

朝七時園舎の窓をあけにゆくわが三毛猫をあとにしたがへ

海原うなばら白く

蒲郡 岡本八千代

集ひたるカフェより見ゆる海原の遠くも近くもたゞたゞ白し

窓からは渥美あつみ半島ちた知多半島今日は境の無き如き白々

時々はこのカフェにて「いーはとぶ」のわれら集ひて歌会したりき

無料にてこの場所貸して下されしに令和一年これにて閉店とか

今はたゞしろじろの海見てをりぬ君との思ひ出きのふの如くに

来し方は次々と浮かぶ君とのことあはれ永遠とこしへと言へるものかは

けふありてきたも昨日のことおもふ入りつ日の今はあかねの色よ

あの本とこの本読まむとあさりつつ土屋文明の恋の歌見つけり

本読めば文明も茂吉もそれぞれに恋心のあるをわれ発見す

何事も成るやうに成ると思ひつつそのまま吾は眠りたるらし

久しぶりにオレンジ色の朝ぼらけ忽ちわれに勇氣湧くごとく

忽ちに一日^{ひと}すぎつつ入りつ日のあかねの色の美^ひしさに揺^ゆれる

何気なく南の窓を開けたれば南へ南へとゆく鳥の群あり

何鳥か空の高きに群なして彼方の南へ舞ひ行く鳥鳥

十人の組の班長もあと三月^{みつき}なにとか終へたし待ち遠しきかな

日記帳

豊川 弓谷 久子

日記帳今年も子よりはやばやと渡されにけり師走となりぬ

黒表紙の二〇二〇年ダイアリー金の横文字指にてなぞる

来年も書き続け行かむ老いの日々変り無き日を只念じつつ

去年の今日の日記帳開く藤川の宿訪れしと書かれてをりぬ

数へたる事も無けれど捨て難したまりし日記帳の幾十冊よ

目白だともみさとは言ひぬ庭中のアロエの花に寄り来る小鳥

夢うつつに聞きぬし物音庇打つ雨音と知るあかとき近し

褒め言葉と嬉しく聞かむ日向の縁が我にびつたりと言ひくれし人

縁先に置きて飽かずに眺めをり貰ひし葉牡丹寄せ植えにして

三色すみれと昔は言ひにきパンジーとビオラの見分け我にはつかず

年の瀬の実感湧かず暖かき日の続きをり今夜は冬至

月に一度の我が外出日主治医へとみさと運転の車に乗りぬ

十枚に満たぬ賀状を書き終える寂しくなりたり我が人生も

古きえにし忘れず君は今年もまた搗きたての餅届けくれたり

墓参りは子等に任せむ老いの身の心静かに正月待たむ

ハロン湾

東京 今泉 由利

五億年の地質にありとハロン湾五十億歳の太陽没む

シリウスのまず輝やきぬハロン湾いまだ夕焼残りをりつつ

夕焼けをしばらく残しゆきにけり明日の朝日と来たらむために

五億年の地質の歴史をもつというハロン湾に一夜をねむる

天国と言ひても良しと思ひつつ生きて見てゐる天国を

自らを半球軸の中心に夜の星々は天球にあり

満天の星々は皆天球上それぞれの距離見えざるままに

明日には満月となる次第にて十四日月と今夜を過す

海の辺に船の明かりのゆれもせずハロン湾の夜過ぎてゆく

少しづつ明けゆく朝を見守りぬその時の間をその時の間を

石灰岩の三千の島々の景観よ地質進化の痕跡見せて

シボシボと梨地のよふに描きたしハロンの海面ひとときシボシボ

左へとゆっくり流れているようなときどき木の葉も混じりてゆきぬ

山盛りの海老の空揚げ熱々は殻ごと尾ごと透明ワイン

船端に寄りて覗きぬハロン湾珊瑚礁見ゆ小魚の見ゆ

夫と分け合ふ

豊川 安藤 和代

朝冷えの霜月三日窓に見る石巻山は黄砂にけむる

庭に咲く小菊ひと枝供えたり小さき秋を夫と分け合ふ

過ぎし日の歌集アララギひもとけば思い出ホロホロ山茶花の散る

バアチャンのしわの中には喜びも悲しみもまぜ今を輝く

いづこにか好物などを見つけしや朝からモズもヒヨも啼かぬ日

ホイル焼きしめじしいたけ舞茸に鮭を包んで秋を満腹

弓張りの山脈澄みて雲ふたつ静かなる昼歌など詠まむ

沿線のホトトギスをば揺りゆらせ特急伊那号今し過ぎゆく

町内に森も林も消えたれば街路樹寝ぐらにひよは群入る

若き頃九人で暮らした日もあるに今宵一合の米をとぎをり

トントンカンカンと冬空に日び隣家は建ち上りゆく

吹きすさぶ大原の畑列なして小さく春待つキャベツさみどり

蜜柑

春日井 清澤 範子

庭にある蜜柑たわわに熟れおりて日柄良き日の今日の収穫

狭窄症の夫は腰をかばひつつ蜜柑取るなり吾に手渡し

大中小に箱に分けつつ蜜柑とる夫は鼻歌うたひながらに

高い木の上に梯子はしごを固定して高枝鋏も使ひ収穫

段ボールに四箱一杯熟れゐたり蜜柑隣り家へおすそ分けする

陽当りの向きによりゐて甘味増す家族三人充分の数

さつそくに味見してみる吾がみかん甘き蜜柑は酸味もありて

蜜柑獲り夫に感謝忘れずに家族三人笑顔でいただく

庭の南天ますます赤く色づきて小鳥のさえずり今朝のひと時

夫の肩もむ時吾は感謝して今日の一日暮れてゆきたり

境界が物置となる隣家のいたどり繁るを切り払ひにけり

ぜん息を患ふ吾の点滴にやさしく娘は付きそひくるる

祈る気持

大阪 伊藤 忠 男

愛犬の危篤を聞きて小走りに急ぐ気持ちは家族そのもの
戒名にもわか作りで書き記す桐の位牌は手作りなりや

家宝院風月犬友居士はこれ俗名「ふう」の戒名なりや

恐るるは期待ストレスプレッシャー選手の重荷いかばかなりや

メダルへの期待を胸にツアー組む選手の重荷避けるをいかに

手を取りて仲良く結ぶ五輪旗の主旨から規制いかなものか

大阪と東京リニア一時間結ぶ未来はつい鼻の先

正月の玄関飾るしめ縄の裏白風に吹かれ年明け

孫来る嬉しさ半分煩わし帰るその日に戸惑いも有り

師の言葉生きる心と生きる道我に示すか我動かすか

オアシスに

東京 矢崎直人

「みる私」マスクの四角小さき窓「みられる私」守られている
水命守り続ける文明の智慧美しく心は深く

オアシスに生きる女性の青き衣裳マスクの刺繍気品現わる
歌舞伎力神怪物の現われたり想像力創造力の

人と人神と神とぞ戦かへり青き女戦士ナウシカ叫ぶ

手に入らぬ無償の愛の道化師の去り逝く姿イヴの夜は更く

香港の現在写す写真展#まずは知るだけキセキミチコの

出会いあり別れのありぬ一年を紅白前に家族と過ごす

夢叫ぶ生きゐていればいつの日か魂の唄 Y O S H I K I S S

イマココの自由を唄う守るため人生は夢椎名林檎は

A I ひばり泣かせ笑わせ贈らるる昔の歌を受けとる心

師に出会ひ歌と出会ひし令和かな誠の心綴り初めし

墨東の

東京 森岡陽子

両国の五人の絵師展開催は集める浮世絵外つ国から

アメリカやベルギーイギリス渡り行き少しの間々の里帰りの絵

墨東の冷たき風の音のして向島歩きは江戸前天ぷら

牛嶋の牛の像の足をなで一万歩歩く平気で歩く

赤鳥居白狐鎮座の神社には風に舞い散る落葉の彩り

夜明け前静かさの冴ゆる時一羽の鴉の寂しげな鳴き声

木の元をきれいに掃いて職人は腕組み見上げ松を仕上ぐる

裏白の反へり押へて鏡餅注連縄の香令和新年へ

踏み台をずらしずらして年の暮あそこも此処もと埃と闘う

チャペルへと室内合奏聞きに行く静かに流れるクリスマス夜の宵

工場見学

豊川 白井信昭

わが家の秋を彩る菊の花白黄薄桃色今を盛りと

白菊に触れつつ歩む庭の路ゆくも帰るも花に触れつつ

白菊のしだいしだいに染まりゆく薄桃色になりたる花壇

パレードの今日という日の晴れやかに皇居より出でて赤坂御所まで

三河なる工場見学バスツアー海老煎餅せんべい味噌みそ抹茶まっちゃ白だしの里

岡崎の五万石でも矢作川やはぎ船は城下まで着きしというここ

我と妻天守閣にも上りたる心地こそすれホテルの九階

真向へる岡崎城の真近にも時雨しぐれの雨にもみぢ盛れり

見わたせば山もと煙る乙川おとの春は桜としか思ひけり

岡崎城春の遠足に來しことも遠き思い出よみがへりくる

乙川の蛇行しつつ懐かしき河津桜の今は裸木

源氏物語

蒲郡 杉浦恵美子

友に逢ふ何時も変はらぬ穏やかさ我が雑念も浄化されゆく

畑の幸箱にどっさり頂いて舌切雀の葛籠さながら

頂きし林檎に柚子にシュトーレン日は傾きて冬至も近し

夫が刷り我が並べたる版画の賀状畳の部屋の端から端へ

かにもかくにも我が家の歴史は消えにけり独り作れる賀状も九年目

渥美にて今年生まれた赤ちゃんはたった五人とぞ半島の先

明日からは日が少しずつ長くなる冬至嬉しい夏至の日よりは

我が家には冬至南瓜も柚子湯すら沸かさないけど夜長を愛しむ

アベマリア四曲聴きて夕陽射すビルの狭間を師走の小走り

暁をあか月と書く源氏物語の千年昔の当て字に和めり

源氏物語千年昔の当て字等に紫式部の生身を感じず

カラスウリ

豊川 山口千恵子

信号を一つ越しまっすぐ行くところ改装すみたるスーパー見えある
今年はや師走となりて貰ひたる農機具店よりいつものカレンダー
ウォーキング気をつけ歩きしはずなのに草の実べったりズボンの裾に
きんかんの木にからみく蔓を引く先には赤きカラスウリ付く
柿すべて食べつくしたる烏たち色付き下がるカラスウリ食はざり
窓打ちて降りはじめたる冬の雨厨に小松菜洗ひてをりぬ
しとしとと終日降りある冬の雨石露の黄の花ぬらしつつ
風になびく皇帝ダリアの淡き花吹きある風に花びら散らず
腹太きカマキリ一つ軒下の日だまりの中のろのろ歩く
郵便受けにチラシ一枚入りをり行方不明の猫探しみると

呼吸法

横浜 阿部 淑子

授彰式無事に終えらる吉野氏は未来を見据え重きメダルと

幾度か危うき病乗り越えて卒寿の春を生かされし幸

意識して長く息吐く呼吸法手が温かいと夫も納得

今年から宛名書きをも印刷に「会いたいわね。」と教え子に細字

清澄の青空に向かいて凜と立つ芽吹きの時を雄々しく待ちて

新春の庭に咲き初む花々に丸餅添えて贈り来す妹

二十軒の個立ちの家屋の完成は個性豊かで立ち止り楽しむ

令和の年末年始

豊川 夏目勝弘

令和令和と八十余り書きて令和二年の準備を終へる

我が家に集まりくるは金かねならず数種の落葉の最終地点

隣接する広場の桜と櫟の木の払はれ落葉の悩みの減りぬ

メ縄と庭の仕事は例年のこと雨の日少なく疲れがたまる

計画の通りに年末の仕事の進み今までになき喜こびのあり

十二月は本読む時間の予定なし年末年始が強要をする

宇都宮への普通電車の往復の十四時間にて読みし一冊

これほどに充実せし年末は始めてなり感謝あるのみ

産土うぶすなの鳥居の前にてネズミならぬキツネに合ひぬ吉凶いづれ

初日の出見るは毎年同じ所寺よりの帰り梅林の近く

新しき令和二年も一日を一生として生きてゆきたし

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

こひねがひし曾孫暫く授かりて吾が干支と同じ年に生れくると
わが干支の子年巡りて春温し初の曾孫の生れる日まじか

三田美奈子

我が名をばまたも書くかと老母は身を証すのに途惑ひており
物思ふ頃にはありしばあばにも誰しも受け容れ難き心は在るなり

水野絹子

皮むきて作りしわれの干柿は日に日に色濃くうま味増すかも
わが畑の作物は皆ひ弱なり草は取るなどアドバイスの有り

牧原規恵

坂の上の鄙びし小さき茶房にて友と過ごししゆるやかな時間
髪染めを止めるとポツリ我に言ふ母の背中の少し淋しも

稲吉友江

もらひ来し花紫の野ポタンも早も散りゆく二片三片と

鈴木美耶子

秋たけなはの郡上八幡に夫と来て共に学ばな今日の短歌会

孫二人と池袋へと出掛けたり元気はつらつ先導はをのこ
新任の市長決まりし神無月ゴージャスに花飾る市役所ロビーに

吉見幸子

二人の人白装束に太刀帯びて檀原神宮の白砂に舞ふ
本殿まへ雅楽のさらひかくり返す檀原神宮のあすは大嘗祭

牧原正枝

空澄みて風おだやかなる秋の日よ保育園児の運動会あり
薄雲のかかりて淡き半月のゆっくり西へと立冬近し

石田文子

今日きたる内田珈琲店の窓ぎはにわれひとりなりランチ「予約席」とて
授業する初めての学校にて対峙する子供らと吾はありし日のまま

森厚子

けふ一日風強き日よ冬の日よ風の香まとひて夫は帰り来
うす昏き光となりつつ冬の雨その音ききつつ部屋ごもるわれ

山崎俊子

現代学生百人一首

東洋大学

帯をしめ天井あおぎひと呼吸一本の声ぼくの初勝利

国士館高等学校二年（東京都）

亀山頼孟

梅雨の日の薄暗い道のそこだけに光があたったような紫陽花

十文字中学校（東京都）

能見倅凧

「平成」とならず混乱三十年次の時代こそ「平成」なるか

成城中学校一年（東京都）

福宮友樹

AIは人間よりも仕事する将来の夢無くなっちゃうよ

星美学園中学校一年（東京都）

古市真季

とりあえずやばいを言えば盛り上がる日本の未来心配になる

星美学園高等学校三年（東京都）

及川詩菜

女子差別日本の闇がひよっこりはん点数だけまともにやって！

星美学園高等学校三年（東京都）

腰越悠

ハルジオン祖母の教えた花の名をふと思いで出す日向の病室

専修大学付属高等学校一年（東京都）

富岡千夏

あたりまえそんな言葉はないのだと災害現場教えてくれる

玉川学園中学部三年（東京都）

西岡英光

贈呈誌

森岡陽子

鹿兒島アララギ 12月号

○忙しく柳の茂み出で入るは目白と雀の小競り合ひならむ

堀之口ふさえ

○空から稲架はせに逆上りする下校児ら雨雲低く垂れたる野路に

千葉源治

○掃き寄せし柿の落葉の紅葉せる一枚手にして掃除終りぬ

奥悠子

○賑やかに枝垂るる萩の花やさし背戸を吹きぬく秋風に舞ふ

郡山繁幸

月虹131号

○上弦の冷たき月に訝させ拍子木打ちて冬の路地行く

駒ヶ嶺泰秀

○港へと至る列車の窓に見る黒き岩壁は陽光吸ひ込む

井村喬泉

○煉瓦道の目地縫ふ草は抜きがたく花咲けばもう愛づるほかなし

鮫島満

○遊水の池に揺れたる蓮の花その風届かぬ位置にいる夏

成島 哲子

冬雷 1月号

○四方八方鉢水飛ばし鶉の水を浴びをり立冬の昼

澤木 洋子

○硝子戸に露つくころとなりにけり手にて拭へば山は青空

天野 克彦

○子狸の眼まなこのような栗の実が落ち葉の中に隠れて二つ

川上美智子

○老木の枝に覆はるる小径通り山の温もり直に身に受く

及川美香子

○石灰石たかく積む駅二つ過ぐ鍾乳洞に母と居たりき

稲田 正康

○花みづきの紅葉せる葉のかげに見る紅の実の思はざる幸

古嶋せい子

○山肌に対角線のみぬきふじ雲のかげ落ち境くつきり

矢野 操

○輝ける花野をいつも遠く見て青年期あり壮年期あり

井上 菅子

虹のハンカチーフ

高橋育郎 作詞

涙でぬれた そのほほを

絹のハンカチーフで おふきなさい

悲しみに閉ざされた その心を

拭き取ってあげなさい

きつと汚れた 黒い影は

拭い去られるでしょう

朝の光が瞼をうるおし 心は晴れます

汗が流れた そのひたい

絹のハンカチーフで おふきなさい

さわやかな活力が そのひとみを

光らせていくでしょう

きつと 拭われるふしわせ

絹のかおりに 包まれて

夜の深みにまどろむ夢よ 朝の訪れ

虹色に光るハンカチーフ

希望の輝き ラララ： ハッピーな夢をさそう

全身にいきわたる 健康美

自然のちからが生みだした 豊かな恵み

いつも離さない 虹のハンカチーフ

人生を彩る 大切なお守り

ありがとうの気持ちを 伝えます

『俳句』

漱石の過ごしし寺や冬紅葉

浜田紀政

バンダナの住職走る年の暮

店々の売声競ふ年の市

歳末の夢買いました三千円

重野善恵

年用意注連縄を張る大公孫樹

キャンドルやひと夜限りのクリスチャン

まあまあの一年なりし冬至風呂

山元正規

浮輪めく大綿虫の背負ふ綿

なんとなく喜寿の坂越し年惜む

白狐祠の屋根に消えゆく冬夕焼

森岡陽子

踏台を左にずらし年用意

寒風に残る一葉の粘り見ゆ

雪吊や袱紗捌きの音一つ

松本周二

柚子湯して「ふるさと」の歌口ずさむ

花の黄をひとつ隠して枯野かな

過疎の村懐に抱き山眠る

山迫京子

還らざる日々を留めて古日記

大木の根こそぎ倒れて冬ざるる

夕富士をよぎる一羽の寒鴉

田中清秀

山茶花の散りて地蔵のかぶり笠

雨の日も晴れる日もあり年の暮

海面を埋め立てしとぞ冬の苑

今泉由利

背伸びして枇杷の白花確かむる

熱々き蕎麦湯にわりぬ今夜酒

極月の日の入り早き津軽かな

今泉如雲

津軽ではこみせと越後では雁木

淑気満つ賓頭盧様に閻魔様

元号の変り目にあり冬木の芽

植村公女

人影の重なりてゆく小春かな

又ひとつ句集届けり冬暖

面差を忘れ果てたる賀状かな

杉浦弘

屋根に来て声すこやかに初鴉

ほろほろと人のみまかる寒の底

声だかの般若心経春隣

一茶名句集より

〔大正十五年六月一日七版〕

我が家やたつた一人もとし忘れ

我家の子供も鬼を追ひにけり

我家を風よけにして浮寝鳥

御地藏と日向ぼこして鳴千鳥

人ちらり木の葉もちらりほらりかな

かさね吟行会

「旧芝離宮恩賜庭園」 十二月

田中清秀

自然の景観の縮図として表現される日本庭園では、険しい山や激しい滝の流れに見立てた石組（「いわぐみ」と読む）がその中心を飾っている。京都の大徳寺大仙院、銀閣寺として有名な滋照寺、高台寺の庭園をはじめ全国各地の寺院庭園で多く見うけられる。今回、吟行で訪れた浜松町にある旧芝離宮恩賜庭園にも、幾つもの名石を用いた石組の庭造りが行われていた。特に根府川石を使った中の島の蓬莱山や飛石、富士の黒朴石を用いた護岸、山溪を流れ落ちる滝の石組は見事である。

令和元年十二月十三日曇り、気温十二度の寒い日となった。今年最後の吟行として全員が揃ったが、冷たい浜風が吹き抜け、その上に周辺の高層ビルからのビル風が加わってとても寒い。園内は枯木に囲まれ閑散とした景色で、松の緑が目立つ他は草花としては僅かに水仙が咲き始めているのみであった。

弧巻のそろふ縄目や男松

雪吊を細かに揺するビルの風

清秀

紀政

雪吊の小さき気品や芝離宮
松の木に雪降る仕度ととのひぬ

正規
由利

この庭園の池は、古くは海水を引き入れた汐入の池で潮の満ち引きで島々の景色が劇的に変化していたが、今は海水の取り入れができなくなり淡水の池となっている。現在、東京に残る江戸初期の大名屋敷の一つで、延宝六年（一六七八年）に老中大久保忠朝が四代將軍家綱より拝領した由緒ある庭園である。その後紀州徳川家の芝屋敷として、また、明治には有栖川家の所有となり宮内省が買い上げた後、東京都に下賜されている。今は国の名勝に指定されている。

楽壽園と呼ばれた庭園の池に、多くの鴨たちが羽根を休めのんびりと浮き寝を気取り、長閑な風景を醸し出していた。そして、最も高い築山の大山からの眺めは壮麗で、中国の西湖の蘇堤を模しており、中の島と浮島を配し湖を形どり一面には小さな州浜が設けられている。

池の辺の狭き州浜に休む鴨
くもる空水鳥休む池の上
街騒（まちさい）の聞ゆる池の浮寝鳥
冬鳥のもぐり広がる波の円

陽子
しのぶ
さち子
れい子

離宮の周辺は多くの高層ビルが立ち、高さ百五十二

メートル四十階建ての有名な世界貿易センタービル（建て替えるプロジェクトがある）やニッセイ浜松町クレアタワービルなどが立っている。さらに竹芝と直結する都市再生事業が着工しており、完成時には歩行者用のデッキの整備と低層部に水田を含む大規模な緑化テラス、最上階には浜離宮や東京湾を一望できる交流ラウンジが出来ると言う。閑静な芝離宮は近代的な超高層ビルの狭間にすっきり隠れてしまうかも知れない。

ビル群を崩す一羽の鴨の水脈

正規

冬空へ機材を上ぐるビル現場

さち子

枯滝や小波ひろふ反射光

周二

紅葉の華やかなのは晩秋であるが、冬になってもなお美しく残っている紅葉もある。時雨や霜にあたっついでいよいよ色を増し真っ赤になるものもあるが、風や雨で傷んで散り残るものは哀れを誘う、離宮には様々な綺麗な紅葉がまだ残っていた。

樹木の芽には成長して花になり後に実となる花芽（かが）と、葉となり後に枝となる葉芽（ようが）の両方がある。剪定の際には花芽を落とさないよう気を付ける、目に見えなくても枝や茎の中に眠っており、後々成長して蕾みになる。冬の寒さの中で植物たちも春の来るのをじっと待っている。

霊山を模す中の島冬ざるる
汐入の池畔の色や冬紅葉
京子
素山
清秀
浜風の赤き冬芽に力あり

寒い吟行は早々にして句会場に向かう、浜松町の駅近くの中華料理店が今日の会場である。個室が確保できており、ランチメニューで三時まで使わせて貰える。ゆっくりと短冊に記入し、選句も十分時間が取れた。一年の締めくくりは最年長の素山会員の音頭で乾杯となった。いつも会場を探し設定して頂く森岡会員の有り難さを改めて感じた次第である。今回は多点句が多かったので二句記載した人もある。来る年の更なる研鑽と向上を願って、令和元年最後の吟行文を締めくくりとしたい。

■かさね吟行会■

日時 二〇二〇年二月十四日（金）
場所 小石川後楽園 吟行を済ませ
集合 涵徳亭 十二時
申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（九四）

丸山酔宵子

『紅葉を巡る東北6県1300キロ』

日本列島も冬型の気圧配置となり、秋も深まった11月半ば、紅葉のまだ残る東北6県、福島・山形・秋田・青森・岩手・宮城と一挙1300キロメートルの弾丸ドライブである。

東北の玄関口白河関を出発し、福島県南会津郡の日光へと繋がる会津西街道（下野街道）、ネギを箸の代わりにして食べるネギ蕎麦が有名な大内宿。山々の紅葉は磐梯山へと続き、裏磐梯にあるエメラルドグリーンの五色沼の水面（みなも）に紅葉が映え陶然とした光景が眼前に迫る。

今宵の泊（とまり）は山奥深い宮城県刈田郡蔵王、将に遠く鄙びた遠刈田（とおがった）温泉。

翌日早朝快晴爽快、芭蕉ゆかりの山寺・立石寺1070段を登り切り、息絶え絶えにやっとの思いで将棋の町天童で小休止。

田園の続く庄内平野を経て、秋田に入り、みちのくの小京都、角館（かくのだて）へ。380年の歴史を誇る武家屋敷が保存されている。楓（カエデ）、銀杏（イチヨウ）が赤や黄色に色づいていて黒色の板塀が続く広い道に紅葉が舞い、非毛氈と共に幻想的な世界。

北国の夕方は早く、底冷えの中、田沢湖高原温泉でライトアップした真っ赤な紅葉を見ながらの露天風呂「アーア、いい湯ダアーナー・」。

湯あたりと銘酒田酒の飲み過ぎで、やや二日酔いの翌朝、田沢湖から玉川温泉を抜け八幡平を経て十和田湖が一望できる発荷（はつか）峠。紅葉のトンネルを抜けて高校の修学旅行で行った十和田湖へのセンチメンタルジャーニー。湖畔の高村光太郎「乙女の像」そして紅葉に彩られた奥入瀬溪流を優雅に散策し、安比高原リゾートのホテル安比グランドへ。

山頂の雪が朝日に輝く津軽富士岩木山を右手に見ながら東北道をひた走る。厳美渓で、空飛ぶ団子を楽しみ、日本三景の松島を遊覧。改修された瑞巖寺を拝観し「こんなところまで津波がきたのか・」と東日本大震災の猛威を改めて驚愕。

因みに、日本三景である松島湾を遊覧して船着き場に

戻ると、松風爽やかな海岸の片隅に五大堂を背景に「日本三景碑」が何気なく建っている。

陸奥松島丹後

天橋立安芸巖

嶋為三処奇観

寛永二十年（一六四三年）

日本国事跡考

林春斎

江戸時代それも17世紀中期の儒学者林春斎（林羅山の三男）が、全国行脚で認めた日本の絶景を「日本国事跡考」に記したもので、安芸の宮島、丹後の天橋立、陸奥の松島である。徒歩か馬か、舟の乗り継ぎぐらいいしか交通手段がない時代に、良く日本列島を縦横無尽、こともなげに歩いたことに感動してしまう。

松島名物 笹かまぼこを喰らいながら、いざ白河へと1300キロメートルを爆走したのであります。

黒堀に掛かる紅葉や非毛氈

酔宵子

2019年12月31日

神にならなかつた鉄舟・・・その十七

結城素明は画家でありながら多数の書籍出版し、前号までに6冊を検討した。今回は、素明を語るうえで重要な書籍としても一冊、『伊豆長八』（昭和13年刊）を取り上げたい。

伊豆長八とは江戸末期から明治にかけて活躍した鍔絵師・入江長八のことで、鍔絵は「鍔」、つまり左官が使う鍔で描いた絵のことをいう。今どき鍔など使うのを見ることは少ないが、鍔は土壁やセメントを塗るときに使う道具である。

また、鍔絵は壁画の代名詞でもある。有名な壁画としては、奈良・法隆寺の7世紀末頃の仏教絵画である金堂障壁画がある。これは土壁に描いているが、以降は紙に描いたものを壁に貼り付ける方法が多く、壁が乾かないうちに色を付けたり、壁が乾く時に灰汁の処理など技術的に困難な点が多く、制作されなくなつたが、長八によつて鍔絵は大きく復興し、新たな絵画作品として価値が生まれたのである。長八の前に長八のような作品はなく、長八以後も長八と並ぶ作品を残した鍔絵師はいない。

長八は江戸時代の伝統的な狩野派の画家の下で絵画技法を学んでいる。ここが他の左官だけの技術者と大きく異なる。いわば、鍔絵とは絵画技法と左官技法との両方の技法の修得によつてなされたことから生れたものである。（参照『伊豆の長八・駿府の鶴堂』財団法人静岡県文化財団）

しかし、伊豆長八の名前が世間に知られるようになったのは、結城素明が『伊豆長八』を出版してからである。おそらくこの本がなければ長八の名前が知られるようになるには、もつと時間がかつただろうし、伊豆西海岸の代表的な観光スポットである「伊豆の長八美術館」も生まれていなかったかもしれないと『伊豆の長八・駿府の鶴堂』が強調する。

このように、素明が63歳時に出版した『伊豆長八』は、専門書としても高い評価を受けている。その素明著『伊豆長八』序文を見てみよう。

『石灰絵なるものに、大だ興味を覚えたることあり。偶々、昭和9年伊豆地方に遊び、三島神社に参拝し、其の宝物殿に於て、図らずも長八作の漆喰塗額、即ち所謂石灰絵なるものを見たり。爰に於て、更に余は之を機縁として、長八伝の編纂に心を傾くるに至れり。同年、再び伊豆に遊び、諸所に其の遺作並に文献を捜求し、更に長八を識る古老を訪ねて、今や殆ど伝説上の人物と化し去らんとしつゝある長八に対し、漸くにして其の伝記上に、一道の光明を認め得たり。爾来、機会ある毎に之が調査を進め、東京方面は勿論、千葉其の他の諸地方をも探訪し、又諸書を渉猟して、遂に此の編をなせり。従来世に行はる、長八伝に於ては、殆ど伊豆人物志の如きを根拠として、更に之に諸説を加へたるもの多し』

このように今までの長八伝とは異なる内容で出版したと述べている。また、白鳥金次郎著『名工伊豆長八傳』（昭和33年刊）は、長八の作品「黄鶴樓之図」を解説したくだりで、続けて次のように述べている。（参照『伊豆の長八・駿府の鶴堂』）

《この額には挿話がある。東都の結城素明画伯が三島神社の宝物殿で初めて見たという額である。画伯はこの作品を見て、その

優秀さを知り、長八伝に筆を染める動機になったという逸品であるから、そもそもこれが長八伝記の発端になった、ゆかり深いものである》

そこで「伊豆の長八美術館」を訪ねてみた。東京からは熱海でJR伊東線（伊豆急行線に直接乗り入れ）に乗り換え、終点の伊豆急下田で下車。ここから東海自動車バスで松崎まで50分、バス停から歩いて10分と結構遠くて時間を要したが、なかなかユニークな建造物である。エントランスの左右の壁は土佐漆喰を用いた「なまこ壁」である。

同館パンフレットによると設計は石山修武氏で、建築界の芥川賞といわれる「吉田五十八賞」を受賞（1985年）しているとある。また、高村光雲の言葉も掲載されている。

《伊豆の長八は江戸の左官として前後に比類ない名人であった。浅草の展覧会で長八の魚づくしの図のついたたの出品があったことを覚えていた。殊に図取りといい、こて先の働きなどは巧みなもので、私はここでいかにも長八が名人であったことを知った。・・高村光雲》

「伊豆の長八美術館」で、端無くも鉄舟と長八の関係を知ることになった。二人は交流があったことを「伊豆の長八・駿府の鶴堂」が語る。



《鉄舟が龍澤寺の星定和尚に参禅したのは明治5年（1872）頃からで長八が参禅したのは明治11年（1878）頃からである。このような中で長八は龍澤寺において鉄舟を相知るようになったのである》

《東京上野・谷中にある鉄舟が建てた全生庵には長八作の石造地藏菩薩像（左写真）がある。これは鉄舟が病床にあつたとき、病気が治るよう



にと祈願して長八が制作したものである。背面に「一心頂禮七二天祐居士」と刻まれていると作品台帳（伊豆長八作品保存会）にある。長八が72歳ということは明治19年（1886）である》《鉄舟と長八との関わりを示す作品としては松崎・伊奈下神社の扁額もある。「伊奈下」の書が鉄舟のもので長八は大理石まがいの着色をして鍍絵で仕上げている》

素明も「伊豆長八」でも鉄舟と長八に触れている。《星定和尚の）法を嗣ぐ者数人、其の俗中に在りては、即ち山岡鉄舟居士深く徳風を嚮慕し、親しく鉗鋸を蒙むる、暇あれば即ち東京より来り、叩参する者昼夜、夜半必ず到る、麦飯を喫し冷茶を飲みて友とす、巧者入江長八有り、亦師の徳化を慕い、寄留殆ど三寒暑、嘗て師の壽像を造り、龍澤に安置す》

素明は、聖徳記念絵画館の「江戸開城談判」壁画を描くことで、幕末時の歴史「史料」解釈を作り、「疑うべくもない正史」へという格上げを遣つて退け、一方「伊豆の長八」では、長八を蘇らせ、伊豆の長八美術館を誕生させたのであるから、素明の功績は大きいのではないか。しかし、素明は絵画界で不当な扱いを受けている。それを次号で検討する。

絹の話 (111)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

シルクロードが拓ける時代背景

シルクロードの命名

今日語られている「シルクロード」と云う呼び名は19世紀後半ドイツのリヒトホーヘンが「ザイデン・シュトラーセン」と呼称し。その弟子で4回にわたって中央アジアを探索し、桜蘭の遺跡などを発見したスエーデンのヘーデンがその名を書物に書いて一般化してきました。その他にも敦煌千仏洞の古写本を発見したイギリスのスタインや日本の大谷探検隊などがシルクロードの夢をかき立てました。

中央アジアの民族移動

中国の周の時代（紀元前8世紀頃）になると牧畜、農業などが発達し、人口が増加して各邑が国となり互いに覇を競い、紀元前6世紀には騎馬遊牧民で金属器文化を持ったスキタイ、紀元前4世紀には陰山山脈方面に匈奴、天山山脈方面に烏孫、タリム盆地周辺では月氏等が強大になり始め、西方ではアレキサンダー大王の東方遠征が

あり、春秋戦国の時代を迎える事になりますが、多くの民が戦乱を避け、各地に移動を余儀なくされました。日本にも多くの人々が押し寄せ、縄文人を駆逐、同化しながら、農耕文化の弥生時代を招来した様に、漢族の膨張のみならず、匈奴が月氏を西方に追いやった事で大きな民族移動の波が起こってきました。月氏は中央アジアに逃れ、「玉を東に絹を西に」に運ぶ交易を生業にする大月氏となって行きます。

交易の必然性

戦いに勝って生き残る為には優れた新たな兵器を入手する必要と相手を調略して攻め込まれない様にしなければなりません。それは西方のヒッタイトが作った優れた鉄（製鉄技術）と馬（汗血馬）が是非とも必要でした。外交物資では絹織物、真綿、紙が特に有効で、屑真綿から作られる絹紙（草木紙は漢代になってから発明、それ以前は木簡綴り）は漢字が整備されて勅命や思想を正確に通達する重様な戦略物資でした。真綿は兵の防寒と防矢性に優れ、軽く運動性に富み、抗菌性など兵の健康維持に役立ち、馬の負担を軽減し、鉄が攻めの武器なら絹は守りの武器として極めて有効な物資でした。

西からは小麦、大豆、瓜、フェルト等、生活文化を支える重要な資源がもたらされ、シルクロードはこれらにより安全に運ぶ道として拓かれる必然があつたのです。

ルートの色々

一口にシルクロードと言っても編の目の様に色々なルートが出来、大きなオアシス都市で合流し、また分かれ西方に到るのです。大別して順次4本の道が出来ました。

初めに南ルート：長安↓敦煌↓タクマラカン砂漠南側と混論山脈の裾のホータンを通り↓オアシス都市カシユガル↓サマルカンド↓アレツポ↓ローマの道が発達して来たようです。

次に中央ルート：長安↓敦煌↓タクマラカン砂漠北側、天山山脈の裾のトルファン↓クチャを通りカシユガル↓サマルカンド。

北ルート：長安↓敦煌↓ビシュバクリから北はゴビ砂漠、アルタイ山脈の北裾をぬけてタラス↓サマルカンドに到る道ですが、古から重なる民族移動でかなり踏み込まれて来た道でもあります。

海ルートは「海のシルクロード」と呼ばれ、陸路が乾きや盗賊などの危険があまりに多いので漢の武帝は杭州↓広州↓インドシナ半島↓インド各地で交易を繰り返してエジプトのアレキサンドリアに到る海路を拓きました。

張騫、法顕の西方探索

漢の武帝は広域な領土を支配する様になると兵の駐

屯、迅速な情報の伝達の必要性と文物の交流で大きな利益をもたらすシルクロードをより安全で効率よいものに整備する必要にせまられてきました。西域の事情を知るため「張騫」を交易の民となった大月氏に派遣しました。相次ぐ戦乱で民心は従来からの儒教的道德律では救われないうと新たに伝わって来た仏教に傾倒して行きますが、その形骸は伝わって来たもののインドからの高僧は中央アジアの中継貿易で栄えるバーミアン周辺に留まり東の果てにまで赴いてくれませんでした。5世紀の初め「仏法」と西方の事情」を調べるため、下級官吏の「法顕」が苦難の道を辿り陸路でインドに到り、帰路は海路で帰朝し「仏国記」を著し西方の事情を明らかにしました。

玄奘の仏法の道

4世紀末中央アジアの鳩摩羅什が仏典を漢訳し、6世紀にはインドの達磨が中国に渡りましたが、7世紀初頭になっても仏法の教義が脆弱であった為、三蔵法師が往復陸路でインドまで赴き、教典を持ち帰り、「大唐西域記」を著しました。その後「義浄」が往復海路でと渡り「南海寄帰内法伝」を書いていきます。

日本では遣唐使の「空海」などが大量の仏典などを持ち帰り、8世紀のはじめに「鑑真」が戒律を伝えました。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年12月23日

外出時のインフルエンザ予防

例年通り年末年始から

インフルエンザの感染率が上がってきました

インフルエンザはアルコールで

ある程度は感染を防ぐことができます

ですので

ドアのノブ

蛇口

交通機関の吊り革や棒

トイレのカギの部分

陳列品

お金

などなど外出時に触れたら

自分の所持品を触る前や食事の前に

アルコールジェルやアルコールシートなどで

拭くことをお勧めします

もちろん手洗いも大切です

外出時は15分〜30分に1回

お茶でうがいをしてそのまま飲んだり

普通に飲んだりして下さい

帰ってきたら

スマホをアルコールで拭くのも効果的です

年末年始のお休みの時期に

インフルエンザに感染して

苦しまない様に予防して行きましょう

2019年12月11日

緑茶の飲むタイミング

師走の寒さがなんて思っていたら

師走らしかぬ暖かさになったりと

気をつけないと服装を間違えそうですね(笑)

患者さんからの質問で

「外出の時の緑茶はどのくらいの間隔で口にするのが良いのですか？」

基本的に好きな時に(笑)なんです

予防や身体の事を考えますと

15分置き位にうがいをしながら飲むのがベストです

マスクは湿度を保つものと

自分のウイルスを他の人に移さないという用途です

です。

口腔内にウイルスはどっしても入ってきてしまいます

そのウイルスを身体に浸透させる前に

胃へ流し込み胃液で消滅させるといって考えです

緑茶は抗菌作用があるのでかなり効果的です

アルコールと緑茶

上手に使いウイルスから身体を守りましょう

「江上浩二の独り言」26 江上浩二

バッテリー

2019年のノーベル賞を、リチウムイオン電池を開発した民間の吉野さんが受賞され、令和の新時代の慶事を盛り上げた。約13年前にマイブログにまとめた「バッテリー」を読み直して、化学電池の発明は古い(バクダッド電池、2000年前)が、改めて現代のICT社会には欠くことの出来ない役割を負ってしまったことに驚嘆した次第です。

明治の文豪らは当時欧州文化の急速流入の中で欧米語を盛んに「和製漢語」へ変換する活動をしていた。その漢語変換作業でバッテリーが電池になった経緯は知らない。少なくとも戦後の一般教育を受けた者でも、電は電気から、池は水がたつぷり溜まっている池を想像し、即ち電気がたつぷり蓄えられている小型の池＝電池になったのだらうと考える。

所謂電池は種々の化学反応により電気を取り出せる「魔法」の箱なのである。今では小型で超高性能で繰り返し充電できる電池がある。さらに燃料電池というものも

開発され、水素(水)やアルコールを元に電気を取り出せる方式のものもある。容量も工場や家庭の消費を賄える大型の燃料電池、最近ではパソコンや携帯電話に使う目的で小型のものまで現れている。意外と普段の生活で使っている材料でも面白半分程度ならば、電気の取り出せる電池も作成出来る。そうすると、電池は予め備えられた電極素材で化学反応を進行させ、電気を出し切ってしまう「魔法」の大箱、小箱と、エネルギーを外から注入し充電して、繰り返し使えるタイプの「魔法」の箱があるのが分かる。

人間も似たようなものだ。人として予め備わっていたものを死ぬまで、いや三途の川を渡るはるか手前で使い切ってしまう人々。少しずつ自分にうそをついて、騙し騙し使って、三途の川をまさに渡ろうとしている時にでも、残っていたりする人間は成仏出来ないかも知れない。さて、人として何か備わっているものとは何だろう。

おぎやーと世に第一声を上げた時点で、すでに備わっているもの。DNAとか遺伝子とかいうやつだろうか。これらDNA・遺伝子も後天的に己がどのような環境で生きるか、どのような影響を受けてきたかによって大きく左右されることは医学的にわかってきている。そうすると、自分の行動、努力によって、いかようにも自分の

進む道、方向は操縦可能になろう。しかし、多くの凡人はこれに気が付いていない。充電できる蓄電池や化学的原料を用いる燃料電池のごとく、その働き・性能を外界から加える充電、原料の時期、その量によっていかようにも制御可能になる予感がする。しかし、本当にそうだろうか。100のうち、40-50ぐらいは操縦できそうだが、どうしようか、右に曲がるか、真直ぐに進むべきかと、未だ、人間の行動の根源になる刺激や意志を解明できていないのが現実と思う。

電池は電気をもたらず。電気は電流と電圧でその大きさが規定される。1.5Vの乾電池の電流は5mAとか。人間は以前大きな誤りを犯した。私はそう思っている。電気の正体がよく分からない時期、水が高さ所から低き所へ流れ落ちていくがごとく、電流も+1.5Vの電圧から0Vのアース地点間を流れると表記した。その後、原子とか陽子とか電子とかの運動が解明されると、本当は負の電荷を持った電子が正極、即ちプラスの電圧方向に引き寄せられる現象であることであつた。言い換えるとマイナスの電子は電流と逆の方向に運動しているのである。この混乱的電気物理は凡人の小、中、高の学校教育で大変な事態をもたらしているはずだ。最初からマイナスの荷電粒子がプラスの電圧を有する所へ引き寄せられていく電流と考えていれば、世界の、人類の科学教育の実状はもっと革新的な結果をもたらしたかも知れない。

このように電気の対、正負の荷電粒子の詰まった魔法の箱がバッテリーと呼ばれる電池である。ただ、2つの要素で対になっているような状態、カップル、ペアというところ、夫婦や婚前の男女、フィギャースケートの男女の組がそのように呼ばれている。主に人の男女である。ところが野球の投手、捕手はバッテリーと呼ばれている。この差異はどこにあるのだろうか。ひよつとしたら、言葉の如く電池の構造と似ているのだろうか。投手は直径10cm、重さ200gぐらいの硬球をホームまで約18mの間隔を初速時速150kmで捕手を目掛けて投げる。これはあたかも負の電極から電子が正の電極へ向かつて、電圧差をもって加速度運動をするのと似てはいないだろうか。これはかなりのエネルギーである。電池はエネルギーを發し、モーターが回ったり、携帯電話の電子回路やカメラ表示板、ボタンのLED光の元になる。エネルギーを生む一組の対がバッテリーと呼ぶべきなのだろうか。

男女でもいい、男・男、女・女の組み合わせでもいい。そして、なにかその間をやり取りする行為が認められ、エネルギーを發するよう訓練されたDNAが個人に備わってきて、初めて異種の人間二人からなる最小の社会をバッテリーとして世間に認められるのだろうか。

平成18年4月8日記す

漢詩研修 (四十)

千代田岳精会

平井茂行

秋思

許

渾

秋思

琪樹きじゆの西風せいふう枕簟ちんでんの秋あき
 楚雲そいうん湘水しちうすい同遊どうゆうを憶おもう
 高歌こうか一曲いつきよく明鏡めいきやうを掩おおう
 昨日さくじつは少年しやうねん今は白頭はくとう

琪樹、西風、枕簟、秋、
 楚雲、湘水、憶、同遊、
 高歌、一曲、掩、明鏡、
 昨日、少年、今、白頭、

【作者】許渾（七九一〜八五四？）晩唐の詩人。字は用晦、一説に仲晦。潤州丹陽（江蘇省丹陽県）の人。初唐の宰相許圜師の子孫。太和六年（八三二）進士に及第、当塗（安徽省当塗県）の県令となったが、若いときからの苦勞心勞のためによせ細り、ついで病氣になつて罷免された。その後、潤州司馬となり、大中三年（八四九）觀察御史に任ぜられた。ついで虞部員外郎から陸州（浙江省建德県）、鄂州（湖北省鍾祥県）の刺史を歴任、再び病氣となつたため、前に潤州の丁卯橋のほとりに建てておいた別荘に隠退し、作つたところの詩をまとめ、その地名にちなんで『丁卯集』（二巻）と名づけた。

許渾は懐古の詩に長じ、整密であると評せられた。七言律詩が得意で、李（白）杜（甫）以後の七律で学ぶべきは許渾ひとりであるときまでいわれた。また、格調は豪麗で、元代に至るまで許渾の詩を慕う者が多く、人々は驪竜の照夜（得がたい珠の意）を得たといつて珍重したということである。左に有名な七言絶句「謝亭送別」を掲げておく。

勞歌一曲解行舟、紅葉青山水急流。日暮酒醒人巳遠、滿天風雨下西樓。

（勞歌一曲行舟を解く、紅葉青山水急流。日暮酒醒むれば人已に遠く、滿天の風雨西樓を下る。）

【解説】秋に感じて、楚山湘水の間を行遊したことを思い、自分の老衰を嘆じた詩。晩年に鄂州（湖北省鍾祥県）の刺史であつたときの作といわれる。

《読み方》第一句を「琪樹の西風枕簟秋なり」と読むものあり、第四句は「昨日の少年今は白頭」と読むものもあるが、ここではとらない。

《語釈》*秋思・・・樂府の一題。秋のもの思い。普通は女性が秋に夫、恋人を思う氣持を詠ずるのを主題とする。

この詩は作者が自分の老衰を嘆じてうたつたものである。*琪樹・・・崑崙山（中国の西方にあると考えられた仙山で、仙女西王母がここに住む）の北にある玉のなる木。ここは庭の木を美しくいつたもの。*西風・・・秋風。*枕簟・・・枕と、たかむしろ（竹であんだむしろ）。寝具をいう。*楚雲湘水・・・楚山の雲、湘江の水で、楚山湘水のあたりを行遊したこと。ここは巫山の神女と湘君の故事にかけて、作者が美女たちと遊んだことをいうのだろう。*高歌・・・声高らかに歌うこと。*掩明鏡・・・自分の老衰した顔を見るに忍びず、すぐ鏡を掩いかくしたこと。班婕妤（前四八頃〜前六頃）の「秋風に対して鏡を掩う」（擣素賦）に基づく。

《通釈》美しい庭の大木に秋風が立ち、枕やたかむしろが冷やかなものを感ずる秋。むかし、楚山、湘水のあたりをいっしょに遊んだ人を思い出す。思わず声高らかに一曲を歌い、歌い終わって鏡をおおいかくした。ああ昨日までの紅顔の美少年は、今はもう白髪の老人になつてしまつたのだ。

『湯島天神』

中屋保之

暫らく前から齒の治療にお茶の水にある日大歯学部付属歯科病院に通っている。「嘔吐過敏」という厄介な習性の老患者を救ってくれているのは、Hさんという素敵な女医さんである。この先生にかかると嘔吐癖が殆ど出ないから不思議である。それと、習い始めて四年ほどになる詩吟で指導されている。大きく口をあけて喉を開くのが好影響をもたらしてくれているのかもしれない。などと勝手な思い込みを胸に、今年最初の治療を終えた後、病院の外へ出てふと気づいた。「孫娘が高校受験！近くには湯島天神！」という訳で、聖橋から北へ向かってほぼ一直線の道の突き当りである天神様を久しぶりに訪れてみることにした。

昭和二年（一九二七）に完成した、美しい放物線を描く鉄筋コンクリート造のアーチ橋の名の由来は、神田川の両岸にある二つの聖から名付けられた。一つは「ニコライ堂」として有名な「東京復活大聖堂教会」、もう一つは「湯島聖堂」である。ニコライ堂は一八九一年に竣工した、ギリシャ十字形のプランを持つビザンチン様式の聖堂である。「湯島聖堂」の歴史は古く、一六九〇年に徳川綱吉によって建てられた孔子廟が始まりだそうであるが、関東大震災で焼失、いまの大成殿（孔子廟）は鉄筋コンクリート造として再建されたものである。因みに、橋は船から見上げた時に最も美しく見えるようにデザインされており、御茶ノ水駅のホームからはややそれに近い視点で見ることができそうである。

勤め人らしき参詣客が多い神田明神を迂回して路の起伏を感じながら、上野池之端方面へ下ってゆく道すがら、「関東総司 妻戀神社」の幟が目に入った。妻戀が気になり立ち寄る。案内によれば、この神社の創建年代等については不詳であるが、日本武尊が東征のおり、三浦半島から房総へ渡るとき大暴風雨に会い、妃の弟橘媛（弟橘姫命）が身を海に投げて海神を鎮め、尊の一行を救った。東征を続ける尊が湯島の地に滞在したので、郷民は尊の妃を慕われる心を憐れんで尊と妃を祭ったのがこの神社の起りだと伝えられる。その後、稻荷明神（倉稻魂命）が合祀された。江戸時代には「妻恋稻荷」と呼ばれ、「関東総司稻荷神社」「稻荷関東惣社」と名のり王子稻荷神社と並んで参詣人が多かったそうである。

さて、湯島天満宮の鳥居を潜り学問の神様である天神様に、孫娘の合格祈念に形ばかりのお守りを買ひ虫の良いお願いを済ませ、境内を散策してみると、記念の碑や遺物の多いのに驚かされる。

『泉鏡花筆塚』

『切れるの別れるのって、そんな事は、芸者の時に云うものよ。……私にや死ぬと云って下さい。』というお蔭のセリフで有名な湯島の白梅の原作は泉鏡花の「婦系図」と言われている。昭和十七年に、里見惇、久保田万太郎らによって建てられた。鏡花の夫人すずは、もとは神楽坂に桃太郎という名で出ていた芸者で、師匠の尾崎紅葉は二人の関係を絶対にゆるさず、「女を捨てるか、師匠を捨てるか」とまで鏡花に迫ったそうである。そのため、二人は泣く泣く離別を決意したという。この体験が『婦系図』の湯島天神の場の下敷きになっているのであろう。

尾崎紅葉がなくなつた後、すずさんとめでたく結婚した泉鏡花先生に好意を抱かせるに十分な逸話といえよう。

【新派の碑】

明治四十一年（一九〇八）の伊井蓉峰、喜多村緑郎による初演以来、新派の代表作のひとつになった。

【講談高座発祥の地】

江戸時代中期までは町の辻々に立っての辻講釈や、粗末な小屋で聴衆と同じ高さで演じられていた。文化四年（一八〇四）湯島天満宮の境内を席場としていた講談師伊東燕晋が、家康公の偉業を読むにあたり庶民と同じ高さでは恐れ多いことを理由に高さ三尺、一間四面の高座を常設、これをもって高座の始まりとし、この境内を講談高座発祥の地とした。

【ガス灯】

明治五年（一八七二）開港地横浜に点灯されたのが最初で、ガス灯は、明開化のシンボルで、明治の時代を象徴するものであった。これは都内で、屋外の物としては、唯一のものださうだ。

普段はスルーする宝物殿を見物してみた。ご祭神の菅原道真公の肖像画が数点展示しており、様々な表情の官公像が楽しめる。【恩賜の御衣】画・安田鞞彦

詩題 九月十日

去年の今夜 清涼に待す 秋思の詩編独り断腸

恩賜の御衣 今此に在り 棒持して毎日 余香を揮す

配流の地・大宰府にて、一年前に天皇より賜りし御衣を持ち、悲しみを表す場面、と解説にあるように、愁いに満ちた悲しげな表情で描かれている。

【綱敷天神】画・谷文晁

大宰府へ配流の折り、立ち寄った港で休息をとる際、官位を剥奪されていた官公には座るものがなく、舳綱を巻いただけの円座にすわらざるを得ない乏しい処遇に晒される。右手に持った笏の先端を強く握りしめ、無念の思いと怒りとを表している。

【柘榴天神】画・伝 徳川家康

菅公没後間もなく、叡山座主法性房尊意の下に菅公の霊が現れ、内裏へ行き恨みを報じようと思うのでたとえ勅宣であっても参内してはならぬと言うので、尊意は、天下は皆王土であるので宣旨が三度に及んだならどうしようもないと答えた。そして喉が乾いているだろうと柘榴を菅公に進めた所、菅公は柘榴を妻戸に刷きかけ、柘榴は炎となり燃え付く。尊意が印を結ぶと火は収まったという説話を描いている。

【渡唐天神】画・橋本雅邦

室町期の禅宗の信仰から成る。東福寺・聖一国師の夢に「禅を学びたい」と求める官公が現れたので、「宋の無準禅師の下で参禅するように」と進言したところ、官公は神通力で渡宋し禅を会得、一夜のうちに戻ったとの説話を描いたものがある。渡唐天神の御姿は、官公に所縁のある梅の小枝を持ちながらの、大陸風のゆったりした装いである。

学問の神様と崇められている菅原道真の人間としての苦悩や葛藤に思いを致すのも一興であろう。

郷きょうに歸かえりて飲のむ

横山精真

西海さいかいを眺望ちやうぼうすれば 吾わが心こころに尽まかせ

飲のまんと欲ほつすれば

丘おかを下くだりて街巷がいこうに臨のぞまん

烏賊いかと鰕魚かぎよ 是これ羞饌しゆうせん

醉吟すいぎん燕語えんごして 郷音きようおんを樂たのしむ



〔語釈〕 ○ 尽くす・…ままよ。まかす。○ 鰻魚・…えびとさかな。○ 酔吟・…酒に酔って歌う。○ 燕語・…酒盛りしてうちとけて語る。○ 郷音・…おくになまり。
〔通釈〕 九十九鳥の海を眺めるに私の心の趣くまみに眺め、酒を飲もうと丘を下って町なかに入る。

ご馳走は、(生け簀から取り出す) 烏賊と伊勢エビに皮剥の刺身だ。快く酔って、お喋りは佐世保弁が何とも心地よい。

※福岡の恩師のお墓参を兼ねて佐世保に帰った。いつも通り、羽田のカウンターで六十五歳以上のチケットを購入するのだ。今回は、福岡行きが午後まで詰まっていた。予定変更して、先ず佐世保に行く事にした。大村からは在来線で大村湾の海の眺めを楽しむのだが、近頃は座席が長いすになって窓の景色が楽しめない。これはJRも観光局もダメだと思う。大村も佐世保も宣伝が下手である。大村湾は車窓から、佐世保の海は丘の上から海を眺める。最も誇り得るものなのだ。

扱、その日も、日が傾いてゆく西海や港の景色を時間の許す限り眺め、そして町に繰り出すと、割烹では八十六になった姉と八十代のお友達。コーラスのグループだそうなので、去年連れ合いをなくした姉がこうやって元気に交友を成している様子は有難いものだ。

私が合流する前からビールをやっていたようだが、改めてサーご馳走を頂きましたよう、と注文すると、遠慮がちだ。さすがは年齢に似つかわしい奥ゆかしさがあるようだ。うまかー話は盛んで、飲んで聞こゆつとは懐かしい佐世保弁。こいもほんなごてよか！。

歸郷飲

令和元年十一月十二日

眺望西海盡吾心
烏賊鰻魚是羞饌

欲飲下丘街巷臨
醉吟燕語樂鄉音

仏教彫刻 (一)

藤崎 徹

入門編

2003年4月、京佛師、松久宗琳佛所、宗教芸術院、関東支部、川村支部長の元に入門しました。機関はカルチャースクール・東急セミナーBE 渋谷校舎・土曜教室です。

先代・松久朋琳師が1973年に初版した「佛教彫刻のすすめ」を参考にし基礎を磨きます。

川村支部長は二ぢ目の松久宗琳師の弟子で京都に通い東京の支部長となりました。

入会し最初に彫刻刀「小刀」を購入し、教本「佛像彫刻のすすめ」を購入し読みながら、「鉛筆削り」を練習しました。

その者の写真は残っておりませんが、鯉節削りのように薄皮を作るように削り終わりました。

続いて「地紋彫り」を練習しました。その時の写真は以下の通りです。

「地紋彫り」の練習には、彫刻刀「小刀」一本で片面八模様を彫ります。

写真を見ていただくとお分かりと思いますが、写真の右端が最初で左は行くほど刃物の使い方がうまくなっていることが彫りの綺麗さでお分かりと思います。私は、子供のころ「肥後の守（折りたたみナイフ）」をポケットに忍ばせ竹、木を見つけては細工をし、鉛筆をナイフ、あるいは、カッター



で削るのは今でも続けています。

地紋彫りには、教室でのみ練習し約二カ月間、四回の稽古を費やし次の過程に進みました。

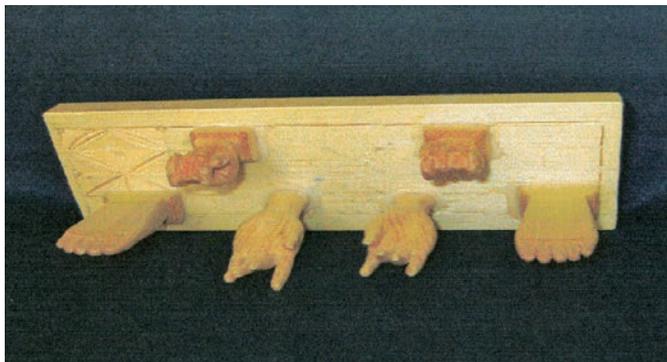
更に、教本「佛像彫刻のすすめ」に沿って練習を進め、「足の左右」、「握り手」、「開き手」を彫刻しました。

最初に足を彫りました。

この足をほめられた事が励みとなりのめり込みに拍車が掛かりました。

まず、足を赤子の足の様に彫ります。

手は、握り手と開き手と進めますが、やはり、赤子の手が見本となります。



以下は、足は裏側、手を開いている状況を写真にしました。

手足の練習を終える頃は、年末に近づきました。



年末年始いよいよ 夏目勝弘

令和、令和と八十数回余り書き、令和二年の準備を終え、安堵したのは、三十日の昼過ぎであった。

冷蔵庫を開けてみたら、納豆が三個と卵のみ。正月三日の食糧は少し前に買った、切り餅のみ。

お墓に新年の花をと、しかしまだ雨が少し降っている。予報を信じて、合羽を着て行く。

山道の坂を自転車を押して行く、体が温かになり、汗の出るほどでもない。

自転車を止め、山に入り、ウラジオと千両を少し剪り、供花の補充とし。

山道には樺の落葉は少なくなっている。小さな小さな松の落葉が、まだ残っていた。

松の落葉の最盛期には、傘に音するほどに散る。墓原に向う道にマツクイに立ち枯れた松があり、松葉を枝に、執着を感じるほどに残っているが葉に艶がなく死の色である。

自然に紅葉して散る葉には、まだ生きた艶があり美しい。命あるすべてに、共通のルールのように思える。人間も同じだ、生かされているという思いが湧く。

墓原には誰も居ない、花を供え、手を合わせたのみで、コンビニへ向う。途中で頼まれていたミニ門松を届け、二言三言話しをし帰る。

コンビニでの買物は総て、袋物ばかり、お袋の味が味わえる人は幸せである。

コンビニからの帰り道は、左右松と杉との林の中、道の両側に少しばかり松の落葉が残っている、杉の落葉はまだ目に付くほどに落ちて残っていた。

杉の落葉を見ると、小学生のころ、籠を持ち、焚き付け用に山道を集め歩いたことが、思い出される。

十歩ほどで疲れる橋を渡ると、橋の袂に多くのドングリが集まっていた

樺の太木が坂の中程にあり、坂をこるがり橋の袂に集まってしまう。

二本三本と十センチ余りの幼木が伸びているが、ここで大木になることはない。

梧桐が電柱のように立っている所が、我が家の前、梧桐の葉は大きく、そのため落葉になると厄介なもの。そのため落ちる前に剪り落してしまう。落葉の後始末よりその前に剪り落すほうが手数がからない。

大きな梧桐の葉が落葉となり、地に落ちる。音が大きく、朝まだ暗いうちに、新聞を取りにゆく背後で、バサという音がし、驚き後を見るが、何も居ない、梧桐の落葉と知る。

○つつがなく令和二年の元旦ぞ生かされてをり生きてゆきたし

六時には産土神社と檀家寺へのお詣りがある。まだ少し早いので、とりあえず一首。

神社とか寺は特別の靈空間といわれている、習慣的に家を出た時の由無し心のまま神社の鳥居を通り過ぎてしまう。

鳥居が神域を示す所であるため、ここで思いを神様の方に、切り変えなくてはならないが、なかなか出来ないのが現実である。

今年鳥居の前にキツネが居たが、稲荷神社ではなく祭神は、倭建命である。

キツネが鳥居を何度も飛び越せば、稲荷大明神になるという俗信もある。

一茶の新年の句を

○あばら家や其身其のまま明の春

「氷魚」のことから (229) 岡本八千代

あのみずみずしかつた木瓜ボケの実が、一ヶ月経って今、私の目の前にある。ああ、何という変わり様であろうか。これが木瓜の老いた姿であろうか。……。手にとれば確かに生きている。色は茶褐色のしわしわ、処々に染みが大小あるけれど、水分のある重みである。香りもまだよい。まるで人間の様である、惻々として感じている私。――

小池光著の「茂吉を読む」という本を読んでいたら、非常に楽しく読めたので、今回はその中から私の思ったことを書いてみたい。

○ わが友の春蘭はるあいらんを描くそばにいでゆを出でし吾は真裸まはだま 茂吉

「わが友」――この時の同行者大橋松平。

大橋松平さんが、春アララギをスケッチしていたら、そこへ、温泉から出てきた茂吉が丸はだかで突っ立って、そこから辺を眺めている。という情景の歌。男の人というのは誰でもそういうところがあるらしいが、事、茂吉である。からなあとと思う。しかし、茂吉も男であり、人間である。今の活躍している男の選手たちがすぐ裸になつたり、ユニホームで汗を拭いたりするところを見ると、男らしいなあーと感心する。

春アララギは、木の方なら私のうちにもあって、一位の木ともいっ。

○ 日本国の児童諸君はおしなべて辛抱しんぱうつよくあれとしぞお

もふ 茂吉

この歌は「雑歌控」の中にある。突如としてこういう歌を茂吉は作るといわれているが、私にはそんなにユーモアがあるとは思われないが、「ふき出しそうなユーモアがある」と言われている一首。それは、「田舎の校長先生の朝礼訓示の域をまったく出ない。」とか。なるほどとは思われない。

○ いま少し気きを落着おちけてもの食へと母にいはれしわれ老いにけり 茂吉

この歌、茂吉が五十五歳の時の感慨。いつもせかせかせかした茂吉のようすが読まれているようだが、子供つてみんなさういうところがあるような気がする。老いた私、実は時間までに行かねばならないような時、台所で立つて食事することも白びやく状する。

○ なまめかしき声こゑしてとほる女をんなあり樹立じゆだちのなかにこたまするごと 茂吉

「なまめかしき声」、女性の声というのは、男の人たちにとつて官能を刺激されるらしい。茂吉はこういう歌がわりあいに多いといわれているらしい。この女の声も別に知っている人で何でもないので、こういう歌ができるのである。いや、それくらいでないかと、男歌の感性は働かないかもしれない。私は、今気づいたのであった。

男の抒情性、女の抒情性とはやはり違うであろう。また、違うからこそ、魅力ある歌となつてゆくのかも知れない。人の真似しないで自分の心の歌を削つてゆきたいなあ」と今夜は思う。

編集室だより【二〇一九年十二月】

今泉 由利

○長かった外国での暮しから、もう日本に住むことにしよう、引越しをしてきた。特派員とアルゼンチンに來られた友人の紹介により、私の東京の住いが定まった。そこを「三河アララギ発行所」として今日に至る。

○外国で続けてきた「クロッキー」を、日本でも続けようとお出掛けした教室にて、日本帰着第一号の友人となつて下さった友達、毎年毎年「クリスマス・パーティー」をして下さっている。何回目か忘れてしまったけれど、今年もまたお招き下さった。楽しくて楽しくて、美味しく美味しくて。日本に帰ってきて良かった。

○築地市場が豊洲市場になってしまったから、「やはり知っておかなければいけない」と出掛ける。新橋から「ゆりかもめ」に乗り、草が生えているばかりの頃、よくスケッチに來ていたから、その変貌がおもしろく「浦島太郎」になったみたいだった。

○ニューヨークに住み、三河アララギのスポンサーの玉由と由野が、年末年始を共に過すからと、彼女達より先に、京都から「正月用品」が届けられてくる。ニューヨークに居て、注文が出来るのはなんて、おこがまし

い気持ちになるけれど、今は、こんなことあたりまえ！なんだろう。

○すっかり行事が嫌いになってしまった私と、一生懸命、日本式の行事をしようとするNYの子達と、ゆずり合いつつ、とんとん二〇一九年が終つてゆこうとしている。

○二〇二〇年・三河アララギ、富士山を表紙にした新年号が刷りあがってくる。富士山の長いデコボコしている裾野が描きたくて、人里離れて、溶岩ゴロゴロの草叢で描いたのだった。富士山ぐるりとひと巡り、四季折々を・・・そんな時の一枚。富士山の後方から朝日が差しはじめた時でした。

○一年の内で、今しか休める時が無いというNYの子達と、その休みを利用して、アジアを知る旅。ベトナムはハノイ、ホーチミン、ハロン湾。そして、カンボジアは、アンコール遺跡にしっかりと紛れたい。

○日暮里よりスカイライナーに乗り、成田空港へ。このところなんだか疲れ果ててしまった気がして、アルゼンチンやニューヨークへ、なかなか出掛けなくなつたけれど、一週間、飛行機に乗らないでいたことがないほど、仕事とか、父母に会いにゆくとか。移動時が、沢山物思い、感じ・・・自分自身だったなあ。

野菜・果物・まんだら (24) ドラゴンフルーツ dragon fruit. pity.



- サボテン科 ヒモサボテン属 サンカクカボテン等の果実。
- メキシコ、中南米の熱帯雨林原産。
- 主な産地は、メキシコ、エクアドルなど中南米。ベトナム、マレーシア、カンボジアなど東南アジア、台湾、中国南部、イスラエル、近年、オーストラリア、スペイン、アメリカ合衆国、日本などでも栽培。
- 果肉、ホワイトピタヤ、レッドピタヤ、イエローピタヤ。胡麻よりも小さく黒い種子が果肉のなかにまんべんなく入っている。果肉ごと、種を取り除くことなく食する。
- 栄養、アルブミン、アントシアン、ブドウ糖、リン酸、ポリフェノール、食物繊維、カロチン、カルシウム、鉄、ビタミンB1、B2、ナイアシン、ビタミンC。……健康食品。
- 赤肉色素は、天然色素として、染料、口紅などに使用する。
- 蕾も、ドラゴンフルーツ果実の厚い皮も、茹でて、冷水にさらし、好みにカットして、食する。サラダ、いためもの、煮物、何にでも。
- 早朝、午前3時、迎えるの車に乗り、サイゴントライアングルにある、ヴインロン 水上マーケットを目指す道中、まっ暗闇の道の両サイドに時々、四角に整備されているらしい所が燃えているようにぼよぼよと明るい、いったい何!ドラゴンフルーツの畑であること、夜も光を当てると、美味しいドラゴンフルーツが実るということを教わった。ドラゴンフルーツにふさわしい情景が見られた。
- 朝も昼も夜もドラゴンフルーツ、パパイヤ、マンゴ、やしの果汁、ランブータン、ザボン、りゅうがん、レンブ……食し続け、身も心も軽くなるのでした。

今泉由利

明治神宮鎮座百年祭 春の大祭 奉祝献詠募集要項

一、献詠 未発表の近詠(一人一首厳守)
紙 はがきに限る

献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる(小・中・高校生は現代仮名遣)郵便番号・住所・氏名(ふりがなを付す)・電話番号・年齢を明記(小・中・高校生は、校名・学年も記すこと)

二、締切日 令和二年二月二十八日(金) 必着
選者 加藤治郎・栗木京子・玉井清弘・日高堯子

一、選歌発表 五月六日(水・振休)歌会当日 (敬称略五十音順)
賞 特選 一〇名 記念品贈呈
入選 二〇名 記念品贈呈

佳作 一七〇名 記念品贈呈
若干名 記念品贈呈

一、送り先 小中・高生 秀逸作
一五一―八五七渋谷区代々木神園町一―一
明治記念総合歌会係 電話〇三三三七九―五五一―

一、献詠披露式

1日 時 五月六日(水・振休) 午後零時三十分

2場 所 明治神宮御神前

一、第百四十二回明治記念総合短歌大会

1日 時 五月六日(水・振休) 午後一時

2場 所 明治神宮参集殿

3 歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評

【講演】連続短歌講座(近現代歌人の家族詠) 第五回

「釈道空―人間を深く愛す」

講師 秋山 佐和子氏

◎ 会費不要

☆来会者には作品集を贈呈致します。

☆作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。

※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催

明治記念総合歌会
〇三三三七九―五五一―

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imazumiyuri.jp/>

E-mail yurimazumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A
今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。